

回想文

釘貫先生とのひと

中澤 信幸

釘貫亨先生との出会いは、私が名古屋大学の大学院に入学した時のことであった。先生はその半年前に名古屋大学に赴任されたばかりで、年齢も四〇代前半。今思えば、非常に鼻息が荒く、意気込みも相当なものだった。

先生は普段は本当に楽しい人で、特に酒の席ではおもしろいことばかりおっしゃる。授業は熱心だがまた楽しそうで、我々を引き込んでいく。しかし研究指導となると、妥協はいっさい許さない。少しでも矛盾や曖昧なところがあると、グリグリとやられるのである。先生はもともと日本語音韻史を専門とされており、私が日本漢字音研究をやっていたものだから、なおさらだったのだろう。おそらく、「こいつはビシビシ鍛えてやろう」と思われていたのではないか。

このような調子で、私は先生にビシビシ叩かれながら博士後期課程に進学した。私は早く学会で発表したいと思っていたが、先生はなかなか許してはくださらなかった。

た。「なぜだろう」と悩みながら、自分としても必死に研究の方向を模索した。進学後一年ぐらい経った時に、授業で発表したのだが、また怒られることを覚悟していた。そうしたら、先生は「だいぶよくなりましたね」と言われたのである。あまりにも意外で、あっけに取られてしまった。「もしかして誉められたのかなあ」などと戸惑ってしまったが、ようやく私の研究が少し認められた気がした。(その後、満を持して学会デビューを果たすことができた。)

私が大学院生になったのは、いわゆるバブルが崩壊したこともあって、大学院進学者がにわかが増えた時期であった。一方、大学教員などの研究職は増えず(むしろ減り始め)、研究者として生き残るのは至難の業となった。まして、大学教員になるためのコネクションなどあるわけもなく、できるのはひたすら論文を書き続けるこ

とだけ。

そんな中でも何とかがんばり続け、目標だった大学教授として生き続けられるのは、ひとえに先生の厳しい指導があったからである。あの時徹底的に鍛えられたお陰で、その後どのような状況にあっても論文を書き続けることができ、研究者として少しは認められるようになって。せっかく研究職に就いても、論文が書けなくなってしまう研究者も多くいる中で、私は今も論文を書き続けているし、これからも（充分な時間と体力さえあれば）ずっと論文を書き続ける自信がある。もともと日本漢字音の歴史や研究史を専門としていたが、最近はなぜか台湾語の発音や研究史で論文を書いている。ただ、それは研究対象が変わっただけであって、研究手法は大学院生の頃から変わっていない。つまり、あの時磨き上げた研究手法が、いまだに生きているのである。これこそ先生のご指導の賜物である。

大学院生になってから指導を受けるようになった私に対して、先生は厳しかった。が、それは恐らく、私にある程度の学問的基礎ができていると思われるからであろう。一方、先生は学部生たちに対して、懇切丁寧に指導されていた。そのかわいがり方は、私にとっては

羨ましい限りであった。そうして、有能な後輩たちが大学院に進学してきたのである。私にとっても刺激になったことは、言うまでもない。

その後、私は名古屋から離れてしまったが、先生との関係はさまざまな形で続いた。先生のご著書『近世仮名遣い論の研究 五十音図と古代日本語音声の発見』の書評を書いたこともあったが、あれは私にとってはプレッシャーだった。

が、私にとって一番印象深かったのは、やはり二〇一六年に山形大学で開催した、日本語学会の大会であろう。その一年前、私が山形大学に赴任して七年目のことであったが、ある日先生から電話があり、「山形大学で学会をやってくれない？」とのこと。先生はその年、日本語学会の大会企画運営委員長になられていたのであった。

全国的な学会を開催できるのは、勤務校にとっても名誉なこと。しかし大学院生の頃に何度か学会の開催に携わったことがあり、その大変さは身にしてみわかっていった。だからこそ、先生は私に依頼してきたのであろう。私としても、何とかお役に立とうと引き受けたのであった。

それからは先生と連絡を取り合うことが増えた。名古屋

屋から離れてしばらく疎遠となっていただけに、私にとっては至福の一年間であった。お陰様で、学会は大きな問題もなく開催することができた。大会が終わる少し前に、先生からねぎらいの言葉をいただいたのが、何かとてもうれしかった。大学院生の時に授業発表で誉められた？ことを思い出した。

その後も先生が運営委員長を務められている間は、学会の度に同窓会のようなことができたが、それも今は途絶えてしまった。先生のご退任時には、またみんなで会えると思ったが、新型コロナウイルスの影響で叶わなかったのは残念である。

私もいつしか当時の先生の年齢を追い越してしまっただが、これからも論文を書き続けるためには、やはり先生からの刺激が必要である。先生のためというより、自分のために、いずれ先生のご退任祝い場を設けたいと思っている。

受贈誌 (二〇一九年九月～二〇二〇年八月)

- 全国文学館協議会紀要 一三
専修国文 一〇五、一〇六
高岡市万葉歴史館紀要 三〇
玉藻 五四
中央大学国文 六三
帝京日本文化論集 二六
東海学園 言語・文学・文化 一九
東京女子大学日本文学 一一六
東京大学国文学論集 一五
同志社国文学 九一、九二
同志社女子大日本語日本文学 三三
同志社大学日本語・日本文化研究 一七
同朋文化 四八
富山大学日本文学研究 増刊一
名古屋平安文学研究会会報 三八
奈良学研究 二二
二松 三四
二松学舎大学人文論叢 一〇三、一〇四
日本学士院紀要 七四―一、二、三
日本近代文学会北海道支部会報 二三
- 日本近代文学館年誌 一五
日本語学論集 一六
日本語と日本文学(筑波大) 六五
日本語日本文学(輔仁大学外国語学院) 四八
日本語日本文学論叢 一五
日本文学ノート 五四
日本文学論究(國學院大) 七九
日本文学論集(大東文化大) 四四
日本文化史研究 五一
日本文芸論稿(東北大) 四一・四二合併号
日本文芸論叢(東北大) 二八
花園大学日本文学論究 一二
阪神近代文学研究 二一
表現技術研究 一五
弘学大語文 四六
弘前大学国語国文学 四一
福岡教育大学国語科研究論集 六一
福岡大学日本語日本文学 二九
藤女子大学国文学雑誌 一〇一、一〇二
文学研究(聖徳大学短期大学部) 三一
文学史研究 六〇
文学論藻(東洋大) 九四